

2022.4.20（水）第91回「ゲーテの会」開催概要



2022年4月20日（水）18時から国際高等研究所において、本年度初の第91回「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」が開催されました。演題は『私の見た朝永振一郎』。講師は小沼通ニ先生（慶應義塾大学名誉教授）。

この「ゲーテの会」は、本年度から始まる〈「新たな文明」の萌芽、探求を！〉プロジェクトの取組として位置付けられ、その上期のテーマ「量子論」を踏まえて開催されました。ハイブリッド形式で開催され、対面のほか、全国からの遠隔参加を含め、80名近い方々の参加申し込みがありました。



朝永振一郎の生涯を俯瞰しながら、ノーベル賞受賞につながる湯川秀樹とのライバル的友情に支えられての学問業績のほか、その師、仁科芳雄亡き後の理論物理学界をはじめとする大学学長・日本学術会議会長等アカデミアで発揮された高い行政手腕、また、パグウォッシュ会議への参画などを通じて平和問題に強い関心を寄せていたことなどについて、自己の実体験を交えながらの紹介がありました。



特に、湯川秀樹との対比の紹介には興味深いものがありました。大局的・創造性・透徹力に富む湯川に対し、鋭い観察力を持ち緻密で着実な朝永、歌舞伎や能などを好む高尚な湯川に対し、落語など洒脱なユーモアセンスに富む朝永、教育者として湯川の放任主義に対し、朝永の基礎からの着実な指導など、人間性とその魅力への言及が印象的でした。



更に、朝永振一郎は、早くからゲーテの『ファウスト』に親しみ、晩年、「科学」と「社会」との関係に深く思索を巡らせたときにも『ファウスト』を思い起こし、「科学」の有用性とともに、その原罪性への認識を欠いてはならないことを喚起するに至ったこと、また、色彩論などを巡って、分析的志向の強いニュートンの科学論を認めるとともに、自然をありのままに観察しようとするゲーテの科学論にも親和性を感じていたなどが紹介され、興味深いものがありました。

質疑応答では、「デュアル・ユース」を巡って、嘗てのように、科学技術研究を、軍事利用か平和利用かに単純な区分をすることができなくなっている。長期的視点に立った国家の科学技術政策の改革など、科学と社会をめぐる現代的課題が抱える矛盾を意識して慎重に判断していく必要性などについても、熱心に意見が交わされました。（文責：国際高等研究所）